

# 此処彼処

ここ

かしこ

特定非営利活動法人

ふくしま支援・人と文化ネットワーク／広報誌



Vol. 21

2021年11月

## 目次

巻頭／沖縄戦と福島原発事故と	1
侵略戦争と原発過酷事故の悲劇を伝えよう	2,3
詩／information／つぶやき	4

〒245-0013 横浜市泉区中田東3-16-5 <http://www.support-fukushima.net> Email:p-c-netw311@nifty.com

# 沖縄戦と福島原発事故と

NPO法人ふくしま支援・人と文化ネットワーク

理事長 神田香織

今年も年明けから緊急事態宣言とまん延防止の繰り返しと延長で、福島ツアーや福島からの講師による講演会などNPOとしての活動がでできず、広報誌の発行のみとなつてしまいました。私のような表現活動に携わるフリーターも同じ。ぼっかり空いた時間を新作づくりに充てようと思つたのは昨年11月に99歳で亡くなった沖縄戦の語り部、安里要江（あさととしえ）さんの訃報に接したときです。

## 沖縄戦の語り部 安里要江さん

その追悼記事を読んだとき、『はだしのゲン』を長年語ってきた者として、安里さんからバトンを手渡されたという気持ちになったのです。資料



小林憲明さんの「ダキシメルオモイ」から～ローマ教皇と鴨下全生さん～

今年も年明けから緊急事態宣言とまん延防止の繰り返しと延長で、福島ツアーや福島からの講師による講演会などNPOとしての活動がでできず、広報誌の発行のみとなつてしまいました。私のような表現活動に携わるフリーターも同じ。ぼっかり空いた時間を新作づくりに充てようと思つたのは昨年11月に99歳で亡くなった沖縄戦の語り部、安里要江（あさととしえ）さんの訃報に接したときです。

をもとに講談『沖縄戦—ある母の記録—』を6月に発表。安里さんは雨が降っても、海鳴りを聞いても、まず思い出すのは戦争のことだったといえます。

同じように思い出すのは故郷福島のことばかりだったのは、8歳でいわき市から東京に避難、壮絶な差別やいじめ

を受けた鴨下全生（まつき）さんもそうでした。

## ローマ教皇と会った少年 鴨下全生さん

鴨下さんはいじめを避けるため福島から避難していることを隠しますが、いわきでの思い出を話せない、原発に反

対するそのわけも語れないことに深く苦しむようになり、やがて支援者に勧められてローマ教皇に手紙を書くようになるのでした。ここから先は9月に発表した講談『ローマ教皇との運命の出会い』原発事故で避難した少年の物語』で聴いてください。

沖縄では激戦地の遺骨の混じった土砂を新基地埋め立てに使おうとし、福島ではトリチウム水を含む汚染水を海洋放出しようとしています。こうした沖縄、福島への冷酷さは、コロナ感染爆発での自宅待機者への対応に通底しています。今や脱炭素化に向けて原発を再稼働を自論むなど、破廉恥極まりない自公政権にはさすがに呆れます。しかし呆れ果ててもあきらめず、微力ながら脱原発社会を目指して当会も私も声を出し続けて参ります。



\*石丸小四郎  
1943年秋田県生まれ。双葉地方  
原発反対同盟代表。3・11原発事  
故以降、脱原発のために全国各地  
で講演、第23回(2011年)多  
瑤子反権力人権賞受賞。

# 侵略戦争と原発過酷事故 の悲劇を伝えよう

双葉地方原発反対同盟 石丸小四郎

■国策の夢と犠牲―  
満蒙開拓団と原発誘致

今年2月、長野の信越放送(SBC)の取材を受けた。その時は、半世紀におよぶ原発の運動と課題を話しただけだった。ところが放送局から送られてきたDVDは「まぼろしのひかり〜原発と故郷の山」というタイトルで、侵略戦争と長野県満蒙開拓団の悲劇を伝え、敗戦後日本に帰還しても故郷に帰る居場所はなく、阿武隈山系に開拓農民として入植した人物が、原発事故で2回目の避難をしなければならなかった現状が収められていた。

原発事故から10年目、この課題を取り上げた秀逸さに驚いた。満蒙開拓団の歴史は、「原子力、明るい未来のエネルギー」と謳われ、国策として進められた原発政策と共通したものがあることと改めて知る機会にもなった。

5年前、最初の取材を受けた、長野県出身の岩間政金さん(当時90歳)は、双葉郡葛尾村に暮らしていたが、原発過酷事故で一帯は高濃度汚染地域となり、全村避難となっていた。生活の全てを置き去りにされ家族もバ

ラバラの状態になり、再び故郷を追われ避難を余儀なくされ今に至っている。「この悔しさは泣いても泣ききれぬものではない!ふるさとを追われるのはこれで2度目だ」。

長野県飯田市に生まれ育ち、戦争中に一家4人で海を渡った。11歳の時、日本の傀儡国満州への入植だった。当時20年間で500万人を目標に、日本人が中国に渡ったと記録されている。日本政府は農業移民を国策として進め、満蒙開拓団と呼ばれていた。それは中国への植民地支配とソ連国境の防衛が目的だった。貧しい農村地帯の家族や若者は夢のような未来…と信じ、誘われるまま大陸に集団入植した。

一方、開拓団を送り出す村には、多額の交付金が入っていた。その額は村の年間予算に匹敵しているケースもあったという。「貧しさからの脱却!」。しかし、入植地は日本の公設企業が現地の住民から、ただ同然で買上げられたもので、侵略の上に成り立つ「まぼろしの大地」そのものであった。

戦後、福島県双葉郡でも同様のことが繰り返された。原発誘致で、「出稼ぎに行かなくても地元での雇用が生まれる」「双葉は仙台に次ぐ賑わいの町になる」と繰り返し宣伝が行われた。「貧しさからの脱却」を謳い文

句に、人々を原発建設へと向かわせたのだ。

■「双葉地方原発反対同盟」  
半世紀の闘い

しかし、核の恐怖を知る人々が、原発反対運動を立ち上げた。国策という権力と金に闘いを押さえ込まれたが、それでも反核・原発運動は続いてきた。

私は秋田県生まれ、職場研修で妻と出会い、1964年結婚、21歳で富岡町の住人になった。当時、原発予定地の土地買収はほとんど終わっていた。のちに双葉町長になった岩本忠夫さんと出会い「石丸君、核と人類は共存できないぞ!」と言われ原発反対運動に関るようになった(岩本さんは町長就任後7・8号増設を主張)。1971年3月、第一原発は営業運転を開始した。それから、すぐに予想を超える放射能汚染と故障が続発した。健康被害も起こり地元からも「原発はやバイ!」の声が上がった。

1972年「双葉地方原発反対同盟」を結成し、「第二原発建設反対署名運動」や「ごまかし公聴会阻止闘争」「変電所へのトランス搬入阻止闘争」などあらゆる抵抗をした。70年代後半からは阪南中央病院の村田医師の協力を得て「原発で働く労働者の生活、労働、健康実態調査」を行った。調査に答えた100

人のデータを基に、原発労働者と原爆被爆者に類似した症状があることもわかった。更に、肺がんや白血病など様々な疾病が明らかになり、労災認定の手助けもした。労働者の話から原発の内部がいかん「デラマ」で、東電は原発を運転する資格も能力も無いこともわかってきた。

県内外の学習会にも取り組み「ポコ」レアメ車に似た原発を高く売りつけられ、運転時の鍵だけ渡され、危険極まりない原発だ!と話した記憶は忘れられない。

今回の信越放送のDVDの中で、当時、第一原発副所長だった(故)増田哲将氏が同じような話をしていることに驚いた。「福島における原子力発電は全部誘致型でなければならぬ。そのため議会対策に深く関わった」「ほとんどの人は日本は原子力の発電技術は持っていると思っていた!しかし「設計はアメリカで、お金と契約書と試運転時の鍵しかない!これが1号機だ」と語る。更に「東電は事故があっても抑えてくれるだろうとの信頼関係を裏切った!これは大罪だ!その責任は社長以下東電のしかるべきポジションの人々も:僕も共犯者だ」と述懐する姿があった。

電源三法という交付金が立地町に流入し、町が大きく変貌して行く。原発マネーは「麻薬依

存』と同様になった。反原発運動は、教職員組合を始め双葉地方労働組合協議会、全日農、青年運動など、多くの人に支えられてきた。とりわけ、次世代の子どもたちの教育にかかわり「教え子を再び戦場に送らない！」と活動して来られた「あけぼの会」の皆様には、幾度となく学習会に声をかけて頂き学び励ましをいただいた。感謝申し上げます。

半世紀以上にわたる、反原発運動は、時として、ブレーキの利いた自転車に、荷物をいっぱい積んで、坂道を登るような想いだった。

■「百年帰れないふるさとをどう考えればいいのか」

2011年3月11日、第一原発の過酷事故が起きた。その日、私は自宅(第一原発から10キロ、第二原発から2キロ)で事務所替わりのログハウスにいた。14時46分、いきなりダダダダッと激しい揺れに襲われた。部屋の薪ストーブが激しく揺れているの上のヤカンが落ちない。「原発が危ない!!」と直ぐに思った。原発について少しは学んできたため、原発が「短周期地震動」に弱いということは知っていた。これが、すべての始まりだった。12日、富岡町は川内村に避難となり家族を逃がし、私は避

難の状況を知りたくて、風向きを意識しながら家に残った。窓やドアの隙間にガムテープを張った。15時36分、1号機の水素爆発音を聞き、「アー」と思った。避難した川内村でも3号機の爆発音を聞き、最悪の状態に進んでいることを実感した。郡山市のビックパレットに移り、そこで手荷物のすべてが盗難にあった。「ここには居られない」と思い、孫2人を連れて、実家のある秋田に避難した。そこには9月までいたが「原発労働者の基地となっているいわき市に戻らなければ」と焦っていた。そんな時、仲間が住まいを見つけてくれ戻ることができた。事故前から発行していた「脱原発情報」は避難先でも発行を続けた。東電交渉の再開もできた。

満蒙開拓団の話に戻せば、満州では日本の敗戦とともにソ連軍が進攻し開拓団は軍に見捨てられ、戦場に置き去りにされた。岩間さんは当時19歳、現地で召集されソ連軍との戦闘の後、捕虜から逃れ中国大陸を彷徨、食べ物もなく息絶える者、ソ連軍の銃弾や現地住民の報復などに倒れていく者が多く、ふり返らずひたすら逃げ続けた。新京に着いたのが半年後だった。岩間さん家族は、戦後、葛尾村に入植し、掘って建て小屋からの生活が始まる。痩せて値の付かない牛1頭の肥育から始め、60年以

上が経っていた。原発事故で、岩間さんは40頭飼っていた牛の殺処分を迫られた。避難先の福島市から餌やりに通っていたが、「毎日餌を食べていた牛が2日に1度ではほとんど痩せて行く。とうとう殺処分を受け入れ、トラックに積んで、石灰をかけて山にブルで埋めた。いやー惨めだったな」と涙をぬぐう。

85世帯が暮らす赤生木地区では、満州からの引き揚げ者の集落もあった。「苦難の末、ようやく築いた第二のふるさとも原発事故で追われてしまった。『原発は安全だ』と言われ、それを信じて来たけれど、今は国と東電に対する不信感はぬぐい去ることはできない」と、浪江町の今野義人さんは語る。避難した2011年の秋、集落全体を集めた会議もたれた時、一人が「俺たちが戻れるんですか?」と聞いた。環境省が東電だったろうか「百年は無理だろう」と、こともなげに答えた。その言葉を聞いて、皆が驚き、ざわめき、その後、シーンとしてしまった。今野さんは「自分たちの集落が、培ってきた歴史が、すべてがなくなってしまう」と思った。「百年帰れないふるさと」をどう考えればいいのかと

茫然とした。過日、私たち「脱原発情報」の編集委員は葛尾村の岩間さんと、白河市に避難されている今野さん宅に伺いお話を聞いた。今野さんは、避難による赤生木の人たちの健康を心配していた。区民230数名の内、ここ4〜5年で40名位の人が亡くなっている。7人家族の内4人も亡くなった家族もあると言う。農作業をして体を動かしていた人たちが、普段の日常を奪われ、不自由な避難生活を強いられる。さらに高線量被ばくによつて生きる力を奪われているのだ。

震災関連死は今年3月末で福島県2319名、岩手県470名、宮城県929名、茨城県42名である。福島県が異常に多い。今野さんの話によれば赤生木の場合「関連死」の申請は殆んどしていないという。却下された人や申請しなかった人を加えれば3000人どころか4000人も超えるだろう。

震災関連死は今年3月末で福島県2319名、岩手県470名、宮城県929名、茨城県42名である。福島県が異常に多い。今野さんの話によれば赤生木の場合「関連死」の申請は殆んどしていないという。却下された人や申請しなかった人を加えれば3000人どころか4000人も超えるだろう。

■放射能汚染と「緩慢な死」は増え続ける

侵略戦争の記録を紐解くと1945年8月15日、中国残留日本人は軍人約110万人、民間人約180万人と民間人が軍人より多かった。福島避難者は今18万人、今も4万人の避難者がふるさとに帰らずにいる。この例えようもない悲劇を決して忘れてはならないし語り

継いで行かねばならない。原発過酷事故から10年。東電の隠蔽体質は依然として続き、汚染水は「ALPS多核種除去設備」では取り除けない。地震大国日本でありながら原発から抜け出せない愚かさ。取り出せる見込みのない880トンの核燃料デブリ。約50万トンの放射能まみれの瓦礫発生量が10年後は2倍になるといふ。誰も信じない「廃炉行程・中長期ロードマップ」は誤魔化しの証でもある。累々とした建屋の老朽化は著しく、地震・津波が襲いかかれば、福島県はもとより全国を「震撼」させる可能性が極めて高いと見ている。さらに、100万人に1〜2人と言われる子どもたちの甲状腺ガンは「県民健康調査」検討委員会では287人と報告されている。

以上のように放射能汚染と「緩慢な死」は残念ながら、増え続ける可能性がある。この現実には世界の核災害の中でも特筆すべき難題で、次世代に禍根を残すことになってしまったことに深い憂いを感じている。これからも国・東電を告発し訴えて続けて行きたいと決意している。

最後に、私は、放射能ほど不条理で、理不尽で、世代間不公平があって、差別的なものはないかと思っている。

## 盆踊り

薄井 清美



回転やぐらから聞こえてくる囃子  
幾重にも踊りの輪が出来る

ウマイゾ ウマイゾ

ヒッチョイ ヒッチョイ

ヒッチョイサー

マメラツカピー

母の血筋は踊り好き

盆踊りには浴衣でそわそわ

八月十五日の未明

東京の叔父が現れた

朝早いうちから酔っぱらい登場

ふるさとが懐かしかったのか

お酒の勢いでいわきまで

タクシーで来てしまった

盆は嬉しや別れた人も

晴れてこの世に会いに来る

遠く聞こえる笛太鼓

あれはいわきの盆踊り

今年は天国まで届いただろうか

## INFORMATION

### 会費・寄付金振り込みのお願い

#### ◆会費・寄付金の振り込み

<振込先>

郵便振替口座

番号：00260-7-108912

名義：ふくしま支援・人と文化ネットワーク

※お手数でも、振り込み用紙の「通信欄」に会費・寄付の区別をご記入ください。

また、振込料金はご負担していただきますようお願い申し上げます。

### 故郷に帰って

◆記録的な暑さだった2018年の夏、夏風邪と熱中症でぐったりした母と、要介護3の認定を受けていた父の赤く上気した顔を見て私はあわてました。実はこの時まで、海に近い高台の実家にはエアコンがなかったのです。自然の風と扇風機で十分快適に過ごしてきたのに、。電気屋さん無理を言っ付けても、らつまでの一週間、本当に長く感じられました。

◆その後私は仕事を辞め、ほぼ実家暮らしになって3年が経ちました。毎日のようにLINEグループで東京の家族と近況報告を交わ

### つぶやき

し、孫の顔を動画で見時々ボランティア的なパソコン仕事をし、コロナ禍でZOOM利用が広がってからは勉強会やイベントに参加。インターネットの時代になって本当に助かっています。

◆昔の部活の間や何十年かぶりに交流を再開した古い友達リアルな生活に彩りを与えてくれます。「車が



いわき市 / 国宝白水阿弥陀堂

ないと不便でしょ？」と言われますが、実は、人生で2度交通事故に遭ったら運転が怖くなりました。遠出の時は友達の車をあてにし、普段は電動アシスト自転車で行ける範囲で暮らします。10分で映画館、30分でプールに行けるんだから十分です。

◆高1の夏休みの宿題で天気図を何枚も書いたことを思い出しながら、NHKの朝ドラを楽しみに見えています。モネちゃんの「故郷に帰って地元の役に立ちたい」という言葉を聞くと、ちよつと胸がチクリ。いや、ズキズキ。今私は何もできないなあ、でも地元のために頑張る人へ応援する気持はいっぱいです。

菅(かん) 晴子